

ラクロワ著『18世紀の慣習、習俗、服装』

講師（西洋服装史）能澤慧子

多くの書物は、出版から時を経ると、その著者が主題とする内容と共に、出版当時の時代のいくつかの側面をも大なり小なり物語っているように思われる。たとえば製本や装幀、挿絵の手法やスタイルには流行があろうし、紙質や文字のサイズや型、その価格や部数などは、生活や文化におけるその書物の位置づけと関連しているであろうからである。従って、ことに歴史書の場合には、内容に加えて、書物の物としての特徴が二重の史料価値を与えることになる。

ここに紹介するポール・ラクロワ（Paul Lacroix, 1806~1884）著『18世紀の慣習、習俗、服装』（*XVIII siècle institutions, usages et costumes, France 1700-1789*. Paris, 1875, first ed. 1874 (383・135-L)) は、そうした意味で18世紀を主題としながら、19世紀後半の歴史や書物の状況をも映し出しているようで、興味深い。

本書はラクロワによる、12年間に渡って発行された8巻からなるシリーズ中の1巻である。このシリーズの他のものも合せて発行順に挙げると次の通りである。

『中世とルネサンス時代の慣習、習俗、服装』1869、〔382. 3-M〕、『中世とルネサンス時代の軍隊と宗教界の生活』1873、76、〔382. 3-L〕、『中世とルネサンス時代の科学と文学』1877、〔382. 3-L〕、『18世紀の文学、科学、芸術』1878、〔382. 35-L〕、『17世紀の慣習、習俗、服装』1880、〔383. 135-L〕、『17世紀の文学、科学、芸術』1882、〔383. 135-L〕、『執政、総裁政府時代、第一帝政期の慣習、習俗、文学、科学、芸術』1884、〔382. 35-L〕いずれも29cm×20cmの版で、各々500頁余。

著者ラクロワについては、すでに昨年9月に発行された『西洋服飾ブック・コレクション』の27、

121番に紹介されている通り、歴史小説作家として、デビューし、1831年『放蕩者達の王者』、1836年『鉄仮面の男』などを発表した。しかしその名声を確立したのは、創作活動よりも40年代末に始まる歴史書のシリーズによってである。歴史小説を書く上での必要性から過去への知識を深めて行ったものが、或いはその逆であったのかは不明であるが、彼は文学と歴史の二つのジャンル、言いかえるならば創作と科学という相異なる世界の双方に身を置いた人物である。今日流の細分化された専門分野にこだわらず、人間にかかわる広い知の世界に闊達に遊んだ、ラルース百科事典の言葉を借りるならば、「知識人 Intellectuel」の、当時の社会的承認の証しともいえよう。彼はまた自らを「愛書家 Le Bibliophile」と号していた。今からほんの100年もさかのぼると、書物を愛すること、即ち、知を愛すことであったのだ。

さて、本書は総頁数523、19章におよぶ大著ではあるが、決して難解な、あるいは無味乾燥な学術書というわけでも、また筆者の解釈や深い考察が述べられているわけでもない。比較的平易で簡明な文章とゆったりした行間のせいもあって、むしろ知的楽しみを求める読者の為の、贅沢な読物である。

こうした本文の性質を補っているのが全頁大の色刷石版画21枚と、それより小さな単色銅版画350枚からなる豊富な挿絵である。単色銅版画の方は、いずれも、18世紀の多彩な顔ぶれの画家達——ヴァトー、ヴァンロー、リゴー、ブーシェ、ヴェルネ、シャルダン、ジョラ、グルーズ、ランスレ、ブシャルドン、サントーバン、エザン、グラヴロ、モロー、コシャン、ドピュクール等の作品の模刻であり、一見、こうした画家達の作品そのも

のかと見紛う程、手本に肉迫している。今日ならさしずめ、写真製版で済ませる所であろう。或いは物の形の説明として、新たに描き直す方法もあったであろうに、18世紀の絵をこのように忠実に模刻したのは、形だけではなく、時代特有の雰囲気をも読者に伝えるためであったことが、前文に謳われている。

前文に続く各章のタイトルは次の通りである。

1. 王と宮廷 2. 貴族 3. フルジョワジー
4. 民衆 5. 陸軍と海軍 6. 聖職者 7. 議会
8. 財政 9. 商業 10. 教育 11. 慈善
12. 司法と警察 13. パリの情景 14. パリの祭と娯楽
15. 料理と食事 16. 劇場 17. サロン
18. 旅行 19. 服飾

まず私自身にとって最も身近な内容である19章から読んでみよう。目次に従えば、ルイ14世時代末期の服装（フォンタンジュ、アンドリエヌ、ファルバラ）、パニエ、ムーシュ（つけほくろ）、男子の服装、民衆の服装、ステッキと扇、靴、床屋と髪結、ルイ16世時代の髪型の多様性と行き過ぎ、革命前夜のイギリス風モード、について語られている。作家としてのラクロワの意識的な方法であろうか、随所に18世紀の文芸作品の引用が散りばめられているのが目につく。約40頁の中にラ・ブリュイエール、モンテスキュー、ルソー、ピュフォン、ヴォルテール、サン・シモン、ルナール、ダンゴー侯爵、デュフレニイ、テュクロ、ボルミー

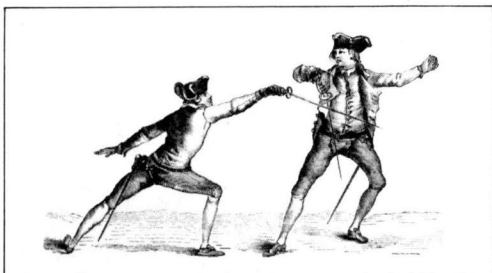
侯爵、メルシ工等々、そのほか誌紙類も数えあげると枚挙にいとまがない。文芸作品のもつ史料価値、フィクションのもつ真実を訴えかけられた思いであり、また我国には比較的馴染みの薄い手紙、日記、回想録等の豊富さにも目を瞠るものがある。そうした私的な記録は、主観的で断片的ながら、極めて生で、現実的な流行の有様を描いてくれるからである。たとえばサン・シモンの『回想録』は、1680年頃、フォンタンジュ型の髪型がいかに巨大なものとなったか、またド・ダンゴー侯爵の日記は、かねがねこれを嫌っていたルイ14世が、細々ながら生き永らえていたその流行に対して、1699年9月23日その意見を明言したこと、そして重ねてサン・シモンの日記は、その後急速にフォンタンジュ型が廃れて行った事実を伝えている。ルイ14世時代には、一人の男性たる王の意見が、女性の流行にかくも影響力を持っていたと断定するのはいささか早計に過ぎるとしても、そこに読者は18世紀の宮廷人の会話を聞くことができようし、宮廷生活を垣間見ることができる。

ほかに戯曲からの引用で興味深いものも多い。

なお、本学図書館には、同じ著者による次の2つの著作が収められている。『フランス服装史』(Costume Histrique de la France. Paris, 1852. (383.135-L 1~10)), 『靴と靴職人の歴史』(Histoire des cordonniers et des artisans. Paris, 1852. (383.2-L))

例。第2章に見られる、貴族のたしなみとしてのフェンシングの型の

① 身のかわり



② 中段の構え、剣を奪われる。



③ 剣を奪われた後の構え



④ 剣を奪われた後の防御の体勢

